鹿児島国体 来月開幕へ

柏崎勢 競泳、卓球など出場

県スポーツ協会は7日、10月7日に鹿児島県で開幕する国民体育大会の本県選手団を発表した。柏崎関係では水泳や陸上、卓球などに出場する。

会期前競技は16日から開幕する。競泳では、今夏の全国高校総合体育大会（インターハイ）の女子200㍍平泳ぎで7位に入った小山風香選手（柏崎翔洋5年）が表彰台を狙う。水球の成年女子は主にブルボンウォーターポロクラブ柏崎の所属選手で構成する。

中心会期の陸上には市内出身の近藤翠月選手（東海大）が成年男子110㍍障害に出場する。卓球の少年男女は産大附属勢が名を連ねた。

柏崎関係の出場選手らは次の通り。

【水球】（17～20日、鴨池公園水泳プール）

▽成年女子監督＝栗林弘至（柏崎市役所）▽同コーチ＝小沼優太（JAえちご上越）▽同トレーナー＝高橋利一（JA新潟厚生連柏崎総合医療センター）▽同総務＝佐々木洋輔（新潟産大教）▽同選手＝長谷川陽子（ブルボン）、小出未来（同）、長谷川華子（柏崎市スポーツ協会）、梅村香穂（柏陽鋼機）、宮川華音（柏崎信用金庫）、飛鳥井真生（秀明大、産附出）、前野美月（新潟産大）、栗林陽華（同）、中村色温（日体大、一中出）、山田果林（産附）、佐藤由依（同）

【ゴルフ】（20～22日、霧島ゴルフクラブ）

▽成年男子選手＝斉藤史晶（上越地域消防事務組合、産附出）

【競泳】（22～24日、鴨池公園水泳プール）

▽女子監督＝三上悟（柏高教）▽少年男子コーチ＝小玉裕道（SA柏崎）▽少年男子B選手＝三井田聖（柏崎翔洋）▽少年女子A選手＝小山風香（柏崎翔洋）

【卓球】（10月12～16日、鹿児島市松元平野岡体育館）

▽成年男子選手＝渡辺凱（国学院大、産附出）▽少年男子監督＝山岸健弥（産附教）▽同コーチ＝本間敏博（県卓球連盟）▽同選手＝山岸駿（産附）、中島瞳輝（同）▽少年女子選手＝山岸唯菜（産附）

【陸上】（10月13～17日、鹿児島県立鶴池競技場）

▽少年男子コーチ＝丸山潤一郎（柏崎総合教）▽成年男子選手＝近藤翠月（東海大、産附出）▽少年B男子選手＝関秋司（産附）

【なぎなた】（10月14～16日、枕崎市立総合体育館）

▽成年女子選手＝石塚季夏子（県なぎなた連盟、常盤出）▽少年女子選手＝平野心優（常盤）

【自転車】（10月15日、大隅広域特設コース）

▽少年男子選手＝行田弦士（柏工）

産大レクチャー ア・ラ・カルト〈190〉

叶わぬ夢を想う

内橋 賢悟

「生活が苦しくて、結婚どころではない」

草食系が多いとされる今時の大学生の悲鳴を、数限りなく聞いた。アルバイトや就活に追われていて、大学生活を満喫する余裕すらない。親が勤める企業の倒産や解雇すら、既に珍しくはない。数え切れないほどの大学生の悲鳴を聞いた。家庭を築けるのは、もはや富裕層の特権。決して途上国の話ではない。どおりで少子化が進むはずである。とにかく正規職に就くことが大切だ。私は、そうアドバイスする。

研究職で非常勤歴が長いほど、生涯非婚者になる可能性が高い。私も例外ではない。精神面の辛（つら）さは、常勤には理解されない。先が見えない不安定な生活を余儀なくされる。ある日、友人から部屋を追い出され、鍵を掛けられた思い出がある。その数日後、突如として訃報を耳にした。自ら命を絶った非常勤の友人の最期の言葉が、今でも忘れられない。あのとき、私が一言でも慰めの言葉をかけていれば、今も学問を語りながら世を謳歌（おうか）しているかもしれない。孤独に一人で生きることは辛い。語りかけることは、もう出来ないが。

3月まで非常勤講師として教壇に立っていた大学で、「あなたは、どのようにしてこの世に生を授かったか」というテスト問題を課していた。合理的経済人という経済学上の理想の人間像は、果たして分析可能な経済モデルを通じて誕生が可能か否かを聞く問題であった。すべての学生が、自身の生命誕生のストーリーを語ってくれた。そのストーリーを描いている途中で、感動のあまり泣き出してしまう学生すら存在した。両親の奇跡的な、あるいは偶然の出会いを通じて生を授かった学生が多い一方、あたかも計算されたかの如（ごと）く生を授かった学生はいなかったように思われる。

学生に、この世に生を授かった理由を聞くことはあるが、自身が生を授かった理由を学生に聴かせることはなかった。時代は昭和30年代前半。神戸で父と母が出会ったそうだ。父親を早くに亡くし家が貧しかった母は、夜間高校に通う一方で百貨店に勤務しながら家計をやりくりしていた。激務と闘う日々を重ねるうち、やがて母は夜間高校の中退を余儀なくされてしまうのであるが、一家を支えるためにも百貨店勤務を辞めるわけにはいかない。そこに父が現れる。程なくして私がこの世に生を授かるに至った。ただし、世代を繋（つな）ぐ生命の連鎖は私の代で途切れることになる。

10年の任期を終えた日銀黒田総裁は、2013年4月に緩和策を繰り出すことで円安に誘導し、輸出企業の収益を改善させ、賃金上昇・消費拡大につなげようと狙った。アベノミクスでトリクルダウンをもくろんだものの、大企業の利益が下請けの中小企業に波及せず、賃金すら上がらなかった。ツケが川下（の中小企業や労働者）に回った。発案者である浜田宏一氏は賃金が上がらず非正規雇用だけが増えたことに対し、もう少し早く疑問を持つべきだった。望ましくない方向へと国民を強いたと懸念をあらわにした。なんだか、遅きに失したような気がしてならない。1人当たりGDPは2位（1988、2000年）から27位に転落した。もはや日本は豊かな国ではない。

深刻な少子高齢化が進行するようになった。ついに私も生涯未婚率にカウントされてしまった。我が子の顔を見ることさえ、叶（かな）わぬ夢になってしまった。

（准教授）

＝毎月1回掲載＝

2023年（令和5年）9月11日（月）　柏崎日報

ユネスコ登録 栄誉胸に

500年の伝承つなぎ熱演

綾子舞 現地公開の舞台堪能

ユネスコ「無形文化遺産登録後、初めてとなった「綾子舞」の現地公開。小歌踊の一つ、「堺踊」も優美な姿で観客を魅了した=10日、市内女谷の綾子舞会館特設舞台

国指定の重要無形民俗文化財「綾子舞」の現地公開（市綾子舞保存振興会、市教育委員会主催）が10日、市内鵜川・女谷の綾子舞会館特設舞台で行われた。国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録され、初めての現地公開。敷地内で常設の舞台を建設中のため、特設舞台では最後の公演となった。大型テントの下には、市内外から約800人が訪れ、演者、囃子（はやし）方が織りなす舞台を堪能した。

綾子舞は、女性が踊る小歌踊と男性による囃子舞、狂言を総称。出雲の阿国（おくに）の初期歌舞伎の面影を色濃く残す古雅な芸能だ。1976年、全国30の芸能の一つとして、国の重文指定を受けた。現在は一般対象の伝承者養成講座、南中校区の児童生徒の伝承学習に引き継がれる。昨年暮れには、綾子舞を含む「風流踊（ふりゅうおどり）」がユネスコの無形文化遺産に登録されるという栄誉に輝いた。

10日は舞台清めの「三番叟（さう）」の後、「小原木踊」に始まり、「小切子踊」で締めくくるまで、高原田、下野の両座元が小歌踊、狂言、囃子舞の合わせて11演目を披露した。観客席では赤いゆらいと優美な所作に見入り、独特のぜりふ回しに聞き入った。

この中で、7年ぶりの狂言「唐猫」は「帝（みかど）の秘蔵の唐猫が行方不明になり、見つけた者には褒美でも土地でもやろう」という話。役人・六ノ進役の新道小6年・宇都宮力空君は初舞台を終え、「座元から教えてもらった足や手の動かし方を意識し、自分的にはよくできたと思う」。

主役・商人役の長岡工業1年・中村駿也君は「せりふの言い方、一つ一つの動きなど7年前のビデオを見て学んだ。会場の皆さんから思い出してもらったり、面白さを感じてもらったりしたらいい」と言い、2人はこの後、狂言「海老すくい」を、さらに中村君は囃子舞「肴（さかな）さし舞」も披露した。

18年ぶりの囃子舞「さいとりさし舞」。12分にわたる大作の熱演が繰り広げられた

歌詞が約100年ぶりに完全復活し、2005年に演じられて以来、18年ぶりの囃子舞「さいとりさし舞」は鷹（たか）の餌にする小鳥を追って、比叡山から善光寺まで行く教え歌。布施真啓さん(39)は12分の大作に「覚えるのが精いっぱいだった。緊張しながらも、復活の歴史をかみしめながら演じた。大きな動きを表現できて良かった」とホッとした面持ち。囃子方を務めた父の武啓さん（65）は「よく頑張った」と弟をねぎらった。

「ツッタラ　タラト　トタント　トッ」というユニークな擬音語・擬態語では楽しませた小歌踊「堺踊」は満・大学生の3人が演じた。柏高3年・九里多映さんは「暑かったけれど、3人でめちゃくちゃそろい、丁寧に踊れ、100点満点。柏崎総合2年・梅沢望さんは「お客さんから一生懸命見てもらい、うれしかった」と満足。産大4年・池鳴菜央さんは「4年ぶりに後輩と踊れて楽しかった。これからも指導者として後輩を育てていきたい」と意欲を見せた。

会場で見附市から訪れた70代の女性は「綾子舞を見たのは初めて。長い歴史を守り続けていることに地域の力を感じる。優雅な舞台にひきつけられ、ユネスコ登録の重みを感じる。来年もまた来たい」と話した。高橋一也・同振興会長(66)は「演者、囃子方は暑い中、頑張って練習し、成果を出してくれた。ユネスコ登録をきっかけに、綾子舞への関心が高まっており、現地公開を大事にしていきたい」と舞台を見守った。

狂言「唐猫」の出演は4人。このうち、小学生、高校生の舞台で沸かせた

幻想的な美「竹あかり」

高田コミセンなど3会場で23日

市内の高田コミュニティ振興協議会（大沼順一会長）が23日、ろうそくの明かりで秋の夜を彩る「たかだ竹あかり」を同地区コミセンなど3会場で開く。時間は午後6時～8時。

「竹あかり」は環境美化事業の一環。荒れた竹林の整備と竹の有効活用を目指し、回を重ねてきた。協力は新潟産大の梅澤・権田ゼミ、高田地区町内会長会、新道町内会、高田地区建築組合、交通安全協会高田地区、市消防団第5分団、ＪＡ女性部高田支部。

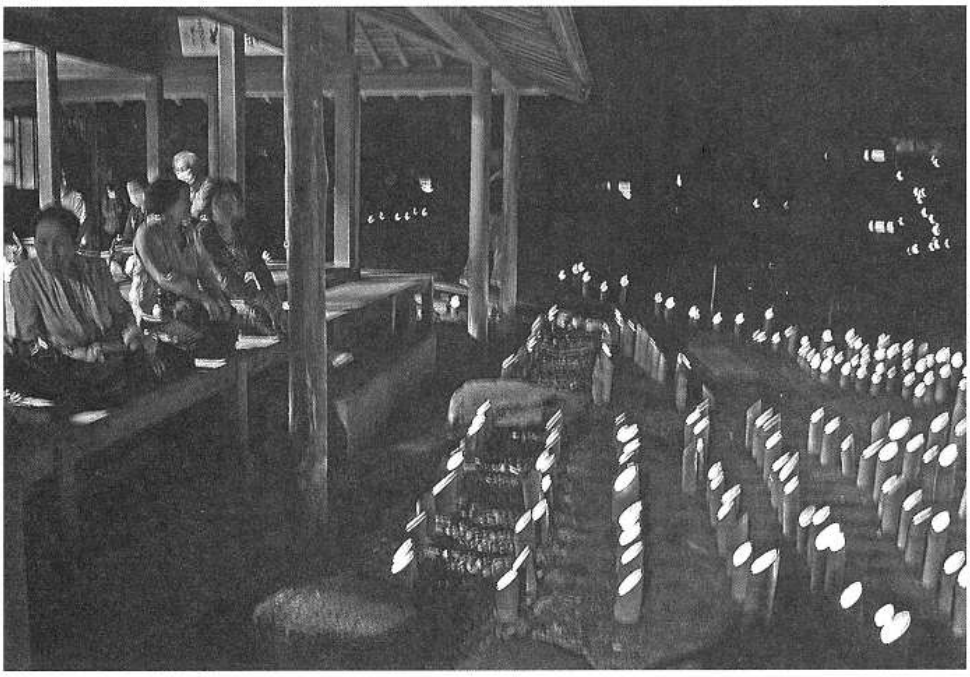
コミセン会場では午後5時半から、彼岸のおはぎの無料配布（先着１００人）やキッチンカーが出店。飯塚邸会場では午後6時半～7時15分に、芸術家派遣事業出前コンサートとして琵琶の演奏。茶席、産大ブースなどもある。開催時間帯に限り入館無料。

5カ年事業の最終年となる「ふるど大池」（堀地内）では1万本の彼岸花のライトアップとイルミネーション。これら3会場をあわせ、竹灯籠１４００本で彩る。

駐車場は同地区コミセン、南中、新道小、飯塚邸で、ふるど大池にはない。イベント中は3会場間を移動するための専用巡回バスを運行する（無料）。各会場は足元が暗く、懐中電灯を用意してほしいという。少雨決行、荒天時は24日に延期。両日とも開催できなかった場合、25日に高田コミセンのみで実施。問い合わせは同地区コミセン（電話ファクス22・４４０１）へ。

初秋の夜に竹あかり

飯塚邸など 心和ませ



ろうそくの明かりがともされた竹灯籠によるイベント「竹あかり」＝23日夜、飯塚邸

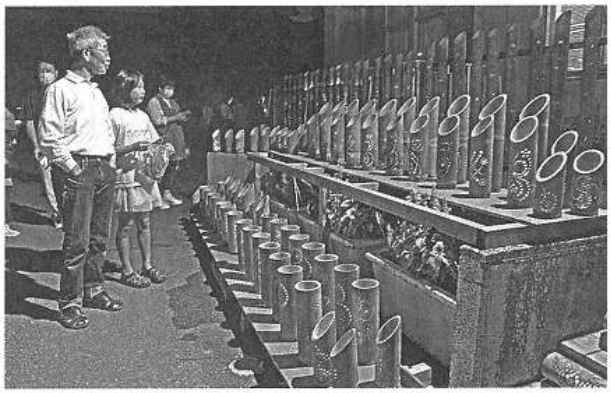
ろうそくの明かりで初秋の夜を彩るイベント「たかだ竹あかり」（高田コミュニティ振興協議会主催、大沼順一会長）が23日、地区内3会場で開かれた。このうち、新道の市史跡・飯塚邸では竹灯籠のやわらかい明かりが庭園・秋幸苑を彩り、訪れた人たちを和ませた。

「竹あかり」は環境美化事業の一環。荒れた竹林の整備と竹の有効活用を目指し、2014年度から始まった。飯塚邸では、地域の人や産大の学生ボランティアらが正面入り口から庭園の奥までにかけ、約15㍍の高さの竹灯籠をずらりと配置した。また琵琶の演奏グループの音色が座敷に響いた。

初めて訪れたという市内小倉町、中村睦美さん(67)は「見方によって、光の感じが変わり、大変幻想的。新型コロナウイルス感染症禍で心が内向きになっていた中で癒やされる」と言い、孫の比角小3年・ななみさんも「きれいで、すてき」と見入った。

友人と一緒に楽しんだ半田2の星野和代さん(58)は「非日常的でとてもいい。明かりを見ながら、お茶を一服いただき、至福のひとときを。琵琶の音も心にしみわたる」と満喫した。

竹を配置したり、点火を手伝ったりした同大権田ゼミの4年生・山本知弘さんは「先輩を引き継ぎ、5月から事前作業を進めた。昨年も参加しており、経験を生かし、並べ方、見せ方の工夫をした。学生目線で地域の活動に協力し、多くの人から喜んでもらい、大学生活の集大成になった」と話した。



デザインが施された大小の竹灯籠200本。冬に倒れた竹を使って製作された＝同、高田コミセン

このほかの会場となった高田コミセンでは横山の内山二三さん(69)が竹に専用の電気ドリルで穴をあけ、デザインした竹灯籠が並んだ。祖父と訪れた剣野小3年・桑野七緒さんは「穴をあけたデザインがすごい」と感嘆。「色合い、模様を楽しんで」と内山さん。もう一つの会場、ふるど天池は今年限定のイベント。彼岸花の咲きが遅く、花姿は見られなかったが、オルゴールの音色が幻想的な雰囲気を醸し出した。

この夜、3会場を合わせた来場者は約1800人。大沼会長(64)は「人口減少、少子高齢化で、活動が下火になる中で、地域を活性化させたいという思いで一丸となって取り組んだ。こうした活動を通し、子どもたちから自分の住んでいる所を『いいね』と思ってもらえたらいい」と話した。

【新潟産業大学】

地域に学び 地域をおこす

―実践活動レポート―

地域おこし協力隊に学ぶ

新潟産業大学の放送部は毎月第2週目の金曜日午後7時から柏崎コミュニティ放送で1時間の生放送番組「ホワイトボード」を担当している。同番組は放送部の部員がパーソナリティーを務め、柏崎での生活や本学でのキャンパスライフで感じていることを中心に、等身大の産大生の声をリスナーへ届けている。

番組では学外の方から出演していただく機会もある。9月の放送では現在柏崎地域おこし協力隊の隊員として活動されている佐藤友理さんをゲストに迎えた。昨年10月に東京からUターンしてきた佐藤さんは、生まれ育った柏崎の魅力を全国へ伝え、地域を盛り上げたいという思いから隊員に応募した。

放送の中で学生から、活動内容を中心に佐藤さんへ多くの質問が投げかけられた。佐藤さんは「これまで柏崎を巡って取材を行い、魅力的な方たちや、スポットを改めて知ることができました。柏崎市地域おこし協力隊としての2年目は、1年目で感じた柏崎の魅力を自分なりにラジオ、そしてSNSを通して発信できたらと思います」とこれまでの活動の手応えと、今後の抱負を語ってくれた。

部長の奥野飛龍さん（4年）は地域おこし協力隊の活動に以前から関心を持っていた一人だ。放送終了後、「柏崎で約4年間生活してきましたが、佐藤さんの発信している情報には初めて知ることが多く、新たな柏崎の一面を知ることができました。私は来年4月から高柳のじょんのび村協会で働くことになっており、佐藤さんの話を参考に、施設や特産品の魅力を発信することで地域を盛り上げていきたいです」と話した。

実際に地域で活躍をする方との交流は、学生にとって大きな刺激になることは間違いない。これからも、地域での交流活動の中で多くのことを学ばせていただければ幸いだ。

（同大学地域連携センター）

柏崎の魅力向上へ連携

商議所 〝高大産〟初の懇談会

市内の5高校、2大学、31企業が集まり、柏崎の活性化に向けた連携懇談会＝25日、柏崎商議所

柏崎商工会議所（西川正男会頭）は25日、高校・大学・企業と連携懇談会を初めて開いた。市内の5高校、2大学、31社から約70人が出席し、柏崎地域の「人づくり」「まちづくり」「産業づくり」に向けたアクションを検討する機会にした。

あいさつで西川会頭は「昨今の人口流出、産業界の労働力不足を考えた時、産学官による未来の人材育成に向けたアクションが必要だ」と危惧。「高校、大学、産業界、行政の4者が連携をより深め、人づくり、まちづくり、産業づくりの流れを加速し、地域の魅力をつくり上げることが大事だ」と連携の意義を述べた。

初めに柏高、常盤、柏崎総合、柏工、産大附属の高校と新潟産大、新潟工科大が進学・就職状況や地域での活動などをそれぞれ紹介した。このうち柏高の阿部英敬教頭は「大学進学者の大多数が奨学金を受け、卒業後にその返済が始まる。就職先の選択肢の一つに給与面もある。数年後に地元就職の選択が充実することを期待する」とした。

元県教育委員の阿部尚義・商議所総合建設部会長は今後の取り組みとして、高校や大学のインターンシップ・出前授業など九つの試案を示し、「このほかに意見をいただきながら、高校や大学のニーズに合わせたアクションを機動的に優先順位をつけて取り組んでいきたい」とした。

参加者の一人、協立エンジニアリングの田辺雅貴グループ経営管理部課長補佐は「このように高校、大学と企業が一堂に会する機会はめったにない。今後、有意義なものになることを期待し、我々も頑張りたい」と話した。